

熱海エピソード・干物

新田 由紀子

新宿からの電車を小田原駅で東海道線に乗り換える。何でもない駅の構内やホームにウキウキする。これだから旅はたまらない。

山旅ばかりのなごりで、こんな気まぐれ旅でも登山リュックを背負っている。両手は空けて荷物は一つ。車両に乗り込み、姦しい女客とせわしないファミリー客を避けて空席を見つけた。すぐに海が見えてくるはず。

窓にはすつと雨が走り始めたが、ま、これはこれでいいだろう。じゃあと東海道線が動き出すと、バタバタと後方から移ってきた男女の二人連れ。色褪せたリュックを背負い、両手には大きな紙袋を下げている。やや昭和な風景。ややっと思っ間もなく隣を陣取られた。

早川を過ぎて海が見えてきた。煙った雨雲が水平線に溶けている。うーん一句ひねらねば。思いを凝らすと、思念の画面にザアと縦スジが入った。大荷物を両足の間に抑え込んだ隣客が、早口で罵り合いを始めたのだ。なにやら符丁も交えて丁々発止とエスカレートしていく。ああ勘弁してほしい。そのうちに異様な臭いがしてきた。動物的で鼻の奥にからむような、懐かしいような、いや嗅ぎたくないような。一句どころではない。車窓はどんどん過ぎていく。万事休す。根府川駅で降りるふりをして前に移り難を逃れた。

熱海駅で降りると先の二人連れが慣れた様子で通り過ぎていった。さて、いざ昼食。はやる心を押さえて土産物街を覗くと、とりどりの魚の干物がこれでもかと並んでいる。さりながら金目鯛だのカマスだのリユックに入れて歩くわけにはいかない。すると車内で漂ってきたあの臭いが。そうか、あの大荷物は干物を運んでいたのか。

海産干物エリア伊豆の玄関口熱海への旅は小田原から始まっていたのだ。夕食の鱈三味定食の見事なアジの開き。朝食の町興しプランは、宿の向かいの店で干物を買って焼いて食べるという産地ならではの趣向。わが日常の食卓からは消えつつある干物が大手を振っている。というわけで、旅と干物は相性がいいよつで。